



11.22.24/ 第9期北海道総合開発計画キックオフイベント

観光から観「公」へ
胆振・日高の可能性と戦略

Tourism for Good

©Adobe Stock

YUSUKE | SHIGURO



©Yusuke Ishiguro 禁無断転載

About Me



YUSUKE | SHIGURO

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院准教授、
観光学高等研究センター(兼務)准教授、総長補佐(広報・社会連携)、
スペイン・バルセロナ大学ホテル・観光学院(兼任)連携客員教授。
専門は観光地経営論。特に観光政策と観光組織。

国土審議会北海道開発分科会計画部会委員、国土交通省「ウポポイへの誘客促進に関する有識者検討会」委員、函館市「グリーン・ツーリズム推進会議」座長、ニセコ町観光審議会委員、倶知安町景観審議会委員、美瑛町「観光振興の財源検討委員会」委員長、斜里町「知床アクティビティリスク管理体制検討協議会」座長ほか

©Yomiuri Shimbun

観光

観光の語源は、
儒教の経典「易経」にある
「觀國之光」である。
他国の歴史や自然、文化、
風景、風俗などの「光」を
「観」という意味から
転じて「観光」となった。
これが「通説」である。

幕末から明治期に日本で
用いられるようになった
背景の解釈としては妥当だが
語源に照らすと？



©Adobe Stock

Foody!
B級が魅力なんです？

觀國之光。利用賓于王。

國の光を観る。以て王に賓たるに利あり。

易経そのものが解釈に諸説ある難解な書物であるが
上田（2004）など易経の原文にあたった研究によれば
「國の光を観る」というのは臣下の立場からの記述である。
よって「光」が、歴史や自然、文化、風景、風俗などの
「静的」なものを指すという解釈には疑義が生じる。



Source : 上田卓爾, 1998, 「「観光」の語源と用例について (井上萬壽蔵の著書を検証する)」『日本観光学会誌』44: 89-94.

©Adobe Stock / metamorworks



広大な胆振・日高エリアの観光を考えると
自ずと対象は広域になり、思考も肥大化する。
広域になればなるほど連携が気になり
やがて連携は自ずと「足し算」に。

「うちには何でもある」は、
観光客にとって「特筆すべきものは何もない」。
重要なことは足し算よりも「引き算」。

01

引き算の連携論

本当の「面的」連携は
「そぎ落とし」た先にある

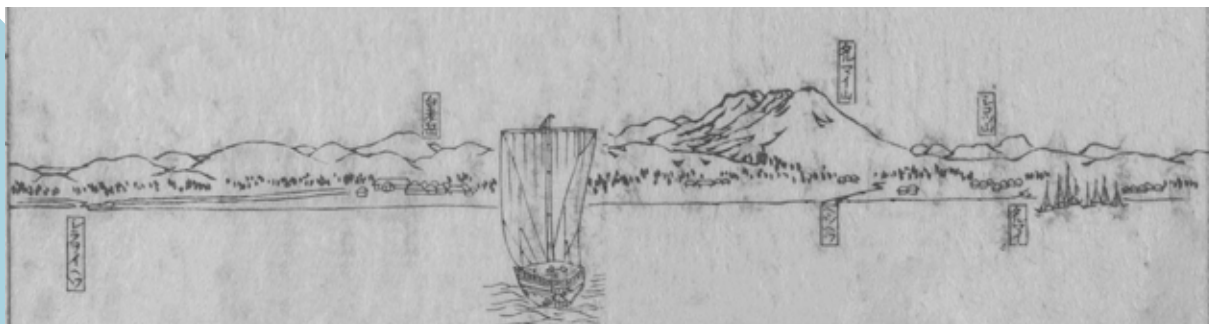
©Adobe Stock / snowing12

いぶりひだか

では、胆振・日高の「光」とは何だろうか。

例えば松浦武四郎が「観」た風景は山と海で構成されている。

「胆振」、「日高」の名称は「日本書紀」から。



Source : 松浦武四郎 (n.d.) 国立国会図書館デジタルコレクション, 2007, 「東蝦夷日誌2編」, Q024年11月10日取得,
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2556234/1/30>

生成AIが考える 胆振・日高



「胆振」「日高」「観光」をキーワードとしてイメージの生成をさせると
風光明媚な海岸の画が高頻度で確認できる。



©Adobe Stock

@Yusuke Ishiguro 禁無断転載

Riviera

イタリアの地中海沿岸の保養地に端を発する「リビエラ」は
なぜ、100年以上にわたって統一的で競争的なイメージを
維持できるのか。



©Shutterstock / Sina Ettmer Photography



Riviera *Italy*

“riviera”はイタリア語で海岸線。
日本ではアマルフィが有名。
19世紀後半にサンレモから拡大

French Riviera *France*

日本では「コートダジュール」。
19世紀に末には
既にRivieraのブランドを獲得

Riviera Maya *Mexico*

メキシコのユカタン半島東岸。
国家事業として始まった開発で
1997年に命名

いわゆる「広域連携」の老舗は
ヨーロッパの保養地開発。
リビエラはイタリアから西進し
モナコ、フランスへと拡大。
20世紀後半には
開発資本のグローバル化により
大西洋を渡りメキシコにも波及。

今日では「リビエラ」の概念は
ビーチに留まらない。
文化、自然を包含したイメージへ。

©Adobe Stock / Freesurf, Shutterstock / Armando Oliveira, Adobe Stock / SAndor

@Yusuke Ishiguro 禁無断転載



1 Topology
地形からの着想
最も伝統的で歴史的な手法。
湖水地方、リビエラのほか
シャンパーニュも

2 Impressionism
印象主義的なブランディング
色による形容が1980年代から流行。
コートダジュール(紺碧海岸)、グリーン
スペインのほか、実はアルプスの語源も

©Adobe Stock / Sven, Adobe Stock / Andrew Mayovsky

住・観の関係性をサステナブルに

「オーバーツーリズム」なんか怖くない

観光を通じた地域づくりには
観光と地域の関係性の持続可能性こそ重要。
地域住民が観光の恩恵にあずかる、
観光に合意できるような場や空間はあるだろうか。

02



© Shutterstock / Totti Frutti

Arashiyama



@Yusuke Ishiguro 禁無断転載

Harajuku



Overtourism ?

「混雑」は今も昔も存在した。
ではなぜ嵐山の竹林が観光客で溢れると
「オーバーツーリズム」となり
週末の原宿は「混雑」のままなのか。

© Shutterstock / Makh, Shutterstock / US 2015

Asakusa



浅草は観光地でもあるが江戸の「生活圏」、下町でもある。初詣でこった返す浅草寺は風物詩として好意的に描かれさえする。



一方、同じ寺社でも清水寺の混雑は批判的にとらえられる。観光客で溢れる参道は今やオーバーツーリズムの聖地。



Kiyomizu

© Shutterstock / nktaro, Shutterstock / weniliou

Definition of Overtourism

オーバーツーリズムは、量的側面と質的側面の2軸でとらえられる。質的変容による地域性の変化を規定するのは**住民の理解と合意**。

観光地化

観光によって地域社会に何らかの変容コストが強えられるが漸進的あるいは事前の合意形成がある点で影響は限定的か管理可能

小

質的変容による地域性の毀損・変質

混雑

行政組織や事業者の提供するサービスや施設の容量超過が短期的に、あるいは非反復的に生じている状態。域内需要でも生じ得るが管理は可能。

高

量的拡大による「地域」の毀損・変質

低

オーバーツーリズム

旅行者による利用が原因で、地域内で提供されるサービスや施設の量・質が低下し、地域住民の生活に支障が生じる状態。しかも影響を管理できず、また合意もない

大

マナー・モラル問題

量的な圧力よりも質的な変容に伴う圧力が生じ、観光に対する抵抗感が生じる。問題が過大に扱われることも多く、差別意識やイデオロギーとも結びついて住民意識を悪化させる。管理は不可能ではないが難しい。

Facilities

一回で二度「美味しい」モデル

住民にも使ってもらえる「住観共用」の観光施設こそ
観光を悪者にしない、観光まちづくりの具現化ツール。
そんな民間施設の整備を後押しすることも重要



Helsinki

© ArchDaily 2008-2023 / Tuomas Uusheimo

Barcelona



バルセロナが持つ暮らしの余剰は
都市計画のなせる技。
イルデフォンソ・セルダが考案した
「セルダ・ブロック」が交流のための
空間と時間を創り出す。
オーバーツーリズムは
この余剰が喪失したことで生じたとも
解釈できる。



住民の生活圏と観光圏の間に
建築やアートを配置するのも近年の傾向。
ハーバーバスやプール、サウナは
パブリックスペースだけでなく
住親共用ファシリティの文脈でも
優位性がある

Helsinki



© Shutterstock / Finn stock, Shutterstock / Lev_Karavanov, Adobe Stock / dudlajzov, Allas Sea Pool / © Huttunen-Lipasti-Pakkanen Architects

03 サステナブルをトガらせる

サステナブル・ツーリズムの目的は
観光産業のサステナブルではない

サステナブルツーリズムは分かるようで分らない。
胆振・日高でサステナブルツーリズムを具現化するには
何をサステナブルにすれば良いのか。
生成AIに「胆振」「日高」の「持続可能な観光」の写真を
創作させると…

©Adobe Stock

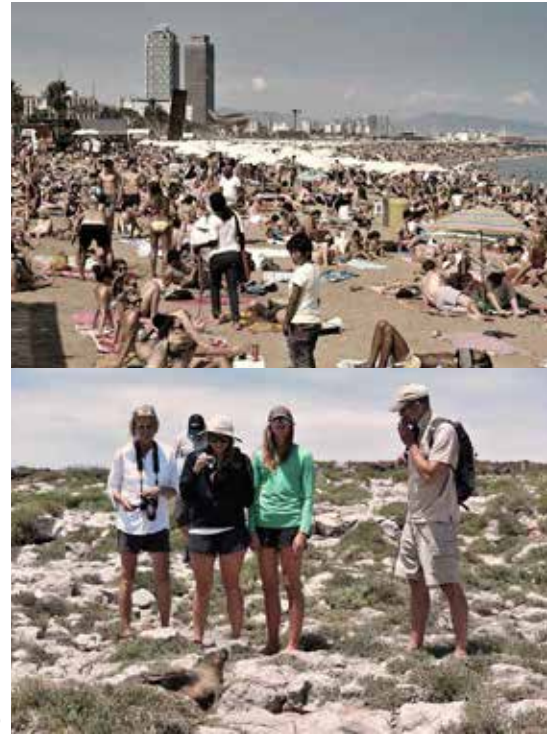


Common Myth

よくある「疑似的」二項対立

- A. マスツーリズム。マスには「大量」という意味もあるがマスツーリズムの主旨は「大衆」。それでも多くの場合、大量、画一性、密集、大きな環境負荷などとともに語られる
- B. サステナブルツーリズム。体験型で少人数、相互理解、そして稼げる、とされるツーリズム

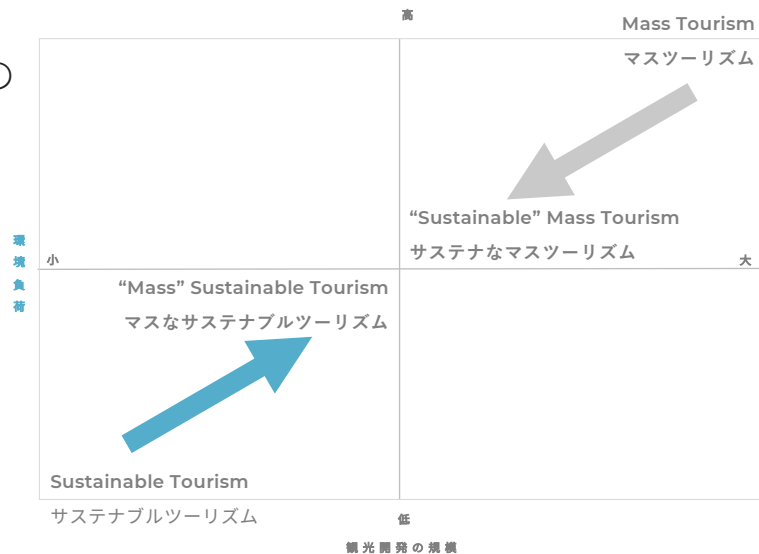
© Shutterstock / nito, Yusuke ISHIGURO



マスとサステナの 幸せな関係性

環境負荷と規模の関係性

サステナブルツーリズムの目的は地球、地域のサステナビリティ。観光産業のサステナブルは手段であって目的ではない。地域でこれを最適化するには自ずと役割とシナリオが異なってくる。



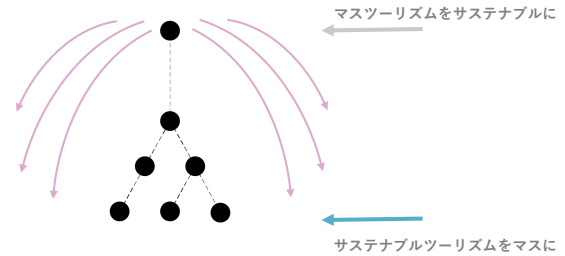
観光の量と社会へのインパクトの関係性 (Scale of Tourism Development / Ecological Footprint Grid)
Ivanov, Stanislav H. and Maya G. Ivanova, 2013, *Mass Ecotourism vs. Eco Mass Tourism*, Conference:
Sixth Black Sea Tourism Forum Conference Paper, Varna, Bulgaria. を加工して筆者作成

点から線、 線から面は本当か

圏域中枢都市の発想

点をつなげば線にはなるが
点の数を増やさない限り
線はどれだけ重ねても
面にはならない。

公平性はサステナブルではない。
垂直でメリハリのある
公正を目指す。



観 公

易経の「光」は
資源や歴史といった
「静的」なものではなく
地域がいかに
マネジメントされているか
というダイナミズムである。

資源論から脱して
行動論、管理論に移行した
先に「地域づくり」がある。
「光」ではなく、
地域づくりの有様を観る
観公へ。

これは「共創」という考えに
強く共鳴する。